



日本の緑化事情 / セダムの注意点を元につくられた VUS500

日本の屋上緑化の中心的存在として使用されている「セダム類」とは、多肉植物の総称で、メキシコ・モンテペルサ・タイトゴメ・ツグマンネンゴサなど多くの種類があります。乾燥に強いために過酷な条件の屋上緑化に使用されるのですが、その中でも使い出したのは、ドイツです。ドイツでは20年以上前からセダム類を使った緑化を行いつつ、技術革新が進んできました。しかし日本とドイツとは気候が違います。ドイツは夏には乾燥しますが、日本では台風も多く、なにより気温という大きな違いもあります。

そこで、大日化成では現東京都市大学教授であり日本のセダムの権威者ともいえる、飯島健太郎氏と技術提携をおこない緑化製品の開発を進めてきました。

ポイントとは、セダム類は日本の降雨量であれば、それだけで充分に育つ。ただし設置の環境によっては適度な灌水が必要になる。雑草が生育しにくい環境を作る。雑草が育たない環境を作るのは、

土量を出るだけ少なくして、セダム類だけが生育できるようにする。

セダムに花が咲くと枯れてしまうので、花が咲きにくいようにセダムそのものが育ちにくい環境をこのようなポイントでVUS500は開発されています。

弊社独自の軽量土・機能面も兼ね備えたバレット。そして何置環境にあわず枯れてしまっても、出来るだけ全滅しないように、複数のバレット内に、複数のセダムを入れていきます。

どれかが枯れてしまっても、他品種が生き残るといっても大丈夫です。

その品種も開花時期をずらした品種を混ぜています。

このように、単にセダムを使えば良いと言っただけではなく、出来るだけ日本の環境で長く使えるように工夫を凝らしてVUS500は作られています。

大日製品現場レポート 大日新聞に関するお問い合わせ・ご意見などはホームページ及び大日化成株式会社 06-6909-6755 までお願いいたします。

京都市内の現場で「スカイコートW」を採用頂きました！



今回紹介させて頂く現場は、テナントビルの外壁タイル面から漏水が発生して、施工業者様から施工主様の提案で「スカイコートW」を薦めて頂き採用に至りました。現場はタイルの浮き等もあり、樹脂注入等、しっかりと下地処理をした上で施工を行いました。

「スカイコートW」は、カタログを見て頂いたように、性能が優れ、かつ、プライマー、防水材、トップコート、の3種類すべてで、現場での計量、材料の混合攪拌が必要なく、施工性に優れた材料です。またすべての使用材料が水性タイプであるため、作業中の嫌な臭いもなく、居住者のおられる状況でもクレームになる事なく施工が可能です。

今回の現場でも施工中はビル使用者様からの臭いなどのクレームもなく、仕上りもトップ半艶を施工し、施工前のタイルの意匠性をほとんど変える事無く施工出来ました。施工後、漏水も止まり仕上りも綺麗で施工主様に喜んで頂けたと聞いております。

薦めて頂いた施工業者様は、販売当初から「スカイコートW」の良さに共感して頂いており数多くの現場で採用頂いております。

「スカイコートW」については、他社同等製品と比べて、施工性が良好で白ボケし難く、仕上りの透明度も高く綺麗に仕上がる所が良いとの評価を頂いています。

全ての材料が、オール1液の水系材料であり攪拌不良の心配、臭い問題がない事も採用頂いた要因となりました。

今後、ビル・マンションの改修等で、外壁タイル面の改修をご検討される際には、是非「スカイコートW」をよろしくお願致します。

DAINICHI CHEMICAL CO., LTD.

● 本社
〒571-0030 大阪府門真市末広町 8-13
TEL : 06-6909-6755(代) / FAX : 06-6909-6702

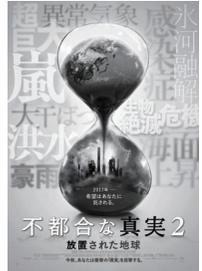
● 東京支店
〒105-0012 東京都港区芝大門 1-4-14 芝楽太楼ビル 5F
TEL : 03-3436-3801(代) / FAX : 03-3436-3803

次号も
お楽しみに

URL : <http://www.dainichikasei.co.jp>

大日新聞に関するお問い合わせ・ご意見などはホームページ及び大日化成株式会社 06-6909-6755 までお願いいたします。

映画で学ぶ 環境問題



不都合な真実 2 放置された地球

原 題 : An Inconvenient Sequel: Truth to Power

監 督 : ボニー・コーエン
ジョン・シェンク

脚 本 : アル・ゴア

制 作 : パーティシパント・メディア

出演者 : アル・ゴア

配 給 : パラマウント映画

上 映 : 99分

公 開 : 2017年7月 (米国)

ドキュメンタリー映画としては異例のヒットとなり、アル・ゴアがノーベル賞を受賞するきっかけともなった「不都合な真実」から10年、その続編となる作品です。

見る人の捉え方によっては、プロパガンダ作品とも捉えられかねないと思えます。

というのも、2017年、当時のドナルド・トランプ大統領が、この映画の柱とも言えるバリ協定を離脱すると宣言したことによって、封切り前にトランプ大統領が悪役になるよう再編集すると制作側が発表したのです。

トランプ大統領は前オバマ政権で火力発電が停止されたことにより、関わる人々が職を失ったこと、それらを復活させることで働くことの喜びをあたえ、税収を増やし経済を活性化させるアメリカファーストという政策を行ったため、環境問題ありきでの政策では無いという理由からです。

これらを悪と捉えるのか、国の発展のためと捉えるのか、そこには様々な考えやオトナノジヨウも悪人にするのは、決して公平な表現ではないと思うからです。

内容は各地でおこっている地球温暖化によるとされる異常気象や自

原因の話はさておき、地球環境は良くない状態になっていることは確かです。氷河の溶け出し、ハリケーンの猛威化、一時的な気温の上昇などなど。それらを放っておくとどうなるかは誰にも判りませんが、何かしなければならぬのは、おぼろげには感じておられる事と思います。

「先進国は安価な火力発電を150年続け、恩恵を受けてきた。今度はインドが同じ恩恵を受ける番なのに、高価な再生可能エネルギーを使えないのは理不尽ではないか？」というインドの主張は判らないでもありません。

ある意味正当な主張かもしれませんが、だれしも豊かな環境での生活を望む

然災害のシーンを印象的に見せ、2016年COP21での展開を裏側（ゴア側）での視点で、前作とは違に分かりやすく見やすく描いています。

なかでもインドは未だ3億人が電気のない生活をしており、その為に膨大な数の火力発電所の建設を計画し、それによる二酸化炭素の排出量が天文学的数値になる事が懸念されています。しかし、インド政府に対して、再生可能エネルギーを推奨し、資金調達を手助けする事で、安価な火力発電からソーラー発電へとインド政府の考えを変えさせたという、ゴア氏の活動の良いところだけを切り取り、バリ協定を離脱したトランプ大統領を悪とするような口ビレ活動を映像化したように捉える方もいらっしゃるかと思います。

ことでしようが、こういった国々の事情もあるため世界的に国と国が話し合って取り組まなければ進みません。

このドキュメンタリー映画を観たことをきっかけに環境問題についてなにかしなければならぬ、と感じた方もいらっしゃるかと思います。

環境問題に無関心な人も沢山いることも事実です。しかし、利益のために環境をないがしろにする人も沢山います。

ドキュメンタリー映画は多くの人にとって退屈なものが多い中、本作品は比較的に見やすい作品となっております。

様々な情報の中どれが正しいと見極めるのは困難かもしれませんが、「無関心は最大の悪である」という言葉もあります。

偏った編集かもしれませんが、アル・ゴア氏という著名な方が訴え続ける事で、一人でも多くの方が環境について何か考え、何か行動するきっかけになり、実際に何か行動に移った人もいることでしょう。

アル・ゴア氏のプロモーション作品だと捉えられるかもしれませんが、誰か1人でも関心を向けて欲しい。それがこの映画の真の狙いかもしれません。